
逢引

海月くらげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢引

【Nコード】

N1309I

【作者名】

海月くらげ

【あらすじ】

わたしの大好きなイムラさんが・・・。

イイムラさんが消えた。

毎日公園で顔を合わせていたのに、ある日ふいにいなくなってしまうた。

近所の人や、公園によく来る人に聞いても、誰もイイムラさんの行方を知らないという。

わたしはイイムラさんがどこに、誰と住んでいるのか知らない。

ただ休日の昼間や平日の夕方に公園で会う。

それだけの関係だ。

それでもわたしはイイムラさんが好きだ。

初めてイムラさんに会ったのは、わたしが小学生の時。

友達とけんかして公園で泣いていたわたしは、自分が世界でひとりきりになった気分になっていた。

寂しくて悲しくて涙があふれ続けた。

声を殺して泣くわたしの隣に黙って腰を降ろし、泣き止むまですつと傍にいてくれたのが、イムラさんだった。

あの日からわたしは学校が終わる一直線に公園に向かうようになったのだ。

寂しくて時折わたしが力一杯抱きついても、迷惑そうな顔をせずにわたしの気のすむまで動かずにいてくれた。

春は、休みの日に一緒に日向ぼっこをしながら桜をながめて転寝をした。

夏は、陽射しの強さに閉口しながらも一緒にセミを取ったり、噴水の側で涼んだ。

秋は落ち葉を踏んで、その乾いた音を楽しんだり、とんぼを追いつけたりした。

冬は、寒がりのイムラさんはすぐ帰ってしまうのであまり好きではなかったが、たまに雪と一緒に眺めた。

イイムラさんの温かさが好きで、優しさが好きで、わたしは来る日も来る日もイイムラさんに会うために公園に通った。

イイムラさんと寄り添う時間はわたしにとって何より大切に、イイムラさんに触れると安心して、イイムラさんの澄んだ綺麗な瞳に見つめられると嬉しくてドキドキした。

無口なイイムラさんの擦れ気味の素敵な声がわたしは大好きだった。

わたしの世界はイイムラさんでいっぱい

それなのに、イイムラさんが、消えてしまった。

公園によく来ていたおばあさんは

「イイムラさんにはイイムラさんの事情があるんだよ。」

と、悲しそうな顔をして言った。

わたしはイイムラさんに二度と会えないなんて信じないし、イイムラさんがわたしにお別れもせずになくなるはずがない。

わたしは公園で待つことをやめて、街中を捜し回った。
せめて、イムラさんの住んでいるところがわかればよかったが、
わたしは公園にいるイムラさんしか知らない。

毎日毎日、学校が終わると街の至る所を歩き回った。

それでも、イムラさんの姿を見つけることができない。

並木通り、違う公園、商店街、団地――

住宅、学校、空き地、駅――

イムラさんはどこにいるんだろう。

もしかして、本当にいなくなってしまったの？

目の前の風景がじわりと滲んだ。
胸がつまって呼吸が苦しくなった。

いつの間にか、いつもの公園に辿り着いていた。

帰巢本能がわたしにあるのだとすれば、わたしの帰るところは、イムラさんのいる、ここなのだろう。

あの時のようにわたしは膝を抱えてうずくまった。
嗚咽がこぼれそうになるのを必死でこらえる。

泣いてしまったら、イムラさんが本当に帰ってこない気がした。

—— かさり

後ろから聞こえたかすかな音に振り替えると

そこには

「イイムラさんっ!!」

少し痩せてしまっていたが、見間違えるはずがない。

わたしは駆け寄り、そして——抱き上げた。

あふれる涙をそのままに、いつもより艶がない毛皮に顔を埋める。

わたしの頬をつたう雫を舐めとり

「にゃあ」

と鳴いたのは確かにイイムラさんだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1309i/>

逢引

2010年10月28日13時46分発行